

（寄稿）

夕張市の医療崩壊は、市民生活へどう影響したか？

～死亡率が変わらず・医療費が減少した分析結果から、
高齢化社会・日本の医療のあり方を問う～

< 要約 >

財政破綻及び医療崩壊が起こった夕張市。しかも高齢化率は48%で日本一（財政破綻当時は45%）。医療が最も必要と思われる町で、医療崩壊は市民生活へどう影響したのか。本稿は、その影響について、データを基に検証する。

データによると、意外なことに、夕張市では75歳以上の人口は増え続けているが、標準化死亡比（SMR）は変わらない。つまり、老人の死亡率に変化がないことを意味している。そのような中で、老衰による自然死が増加している。

その結果、高齢者1人あたり医療費の減少、救急車の出動回数の減少、特養の看取り率が100%になるなど、医療崩壊とは言えないような変化が起きていた。

その背景には、「病院依存」から「天命を受け入れる」、市民意識の変化があったのではないか。

診療費や医療費が減ったかわりに介護費は増加しているが、医療費＋介護費のトータルでみるとコストは減少している。

高齢化社会で重要なのは、最期まで医療に頼る意識から、病気や障害と上手に付き合い、天命を受け入れる市民意識へと徐々にシフトしていくこと、そしてそれを支える介護体制と少しの医療ではないだろうか。

2016年11月21日

Healthcare note

（No. 16-11）

寄稿者名：
南日本ヘルスリサーチラボ
代表
（元夕張市立診療所・所長）
森田 洋之

編集主幹：
野村ヘルスケア・
サポート&アドバイザリー
市川 剛志

野村證券株式会社
金融公共公益法人部